再建に向けていま、塗師自身が動く

よみがえれ！輪島の漆器

輪島に工房を構える塗師・赤木明登さんは、自身が被災しながらも、漆器作りに携わる職人たちの住まいと職場の再建に邁進中。今回の震災をきっかけに考えたという、輪島の漆器のこれからについて伺いました。

撮影＝高崎寛郎［P52〜55］ 湯浅 啓［P56］
編集・文＝平田剛三（本誌）

能登の料理を受け止める、堅牢で美しい器

赤木さんの李朝盤に飯器とそのふたを並べ、紅芯大根、加賀蓮根、蕗の薹など前菜を盛り付けた。「茶寮 杣径（さりょうそまみち）」にて。

漆の魅力を再発信し始めた その直後に被災

使いやすく、美しい――職人が作り、使う人が育てる〝日用の美〟として、輪島の漆器はこれまで多くの人々に愛用されてきました。その特徴を決定づけるのは「『輪島地の粉』と呼ばれる珪藻土」と、塗師の赤木明登さんは話します。

「輪島市郊外にある地の粉山を掘ると、珪藻土の層があります。珪藻土は海にいるプランクトンの骨格や外殻が積もってできますが、これが地殻変動によって陸地に表れました。江戸時代の漆職人がその精製方法を見つけて漆器に生かし、輪島塗の原型ができたといわれています。珪藻土は多孔質で空気の層があるため、漆に混ぜて使うと強度が高まるだけでなく、耐熱性も高くなります。輪島地の粉は京都や会津など他の産地では使われず、輪島塗だけに使われてきました。海は津波という厄災をもたらしましたが、私たちに恩恵も与えているのです」

赤木さんは1988年に輪島に移り住んで35年。江戸時代から受け継がれた漆器の歴史を振り返りつつ、その技を未来へ持続させる方法を模索してきました。その解決法のひとつが2023年7月に始めた「茶寮 杣径」だったと赤木さん。

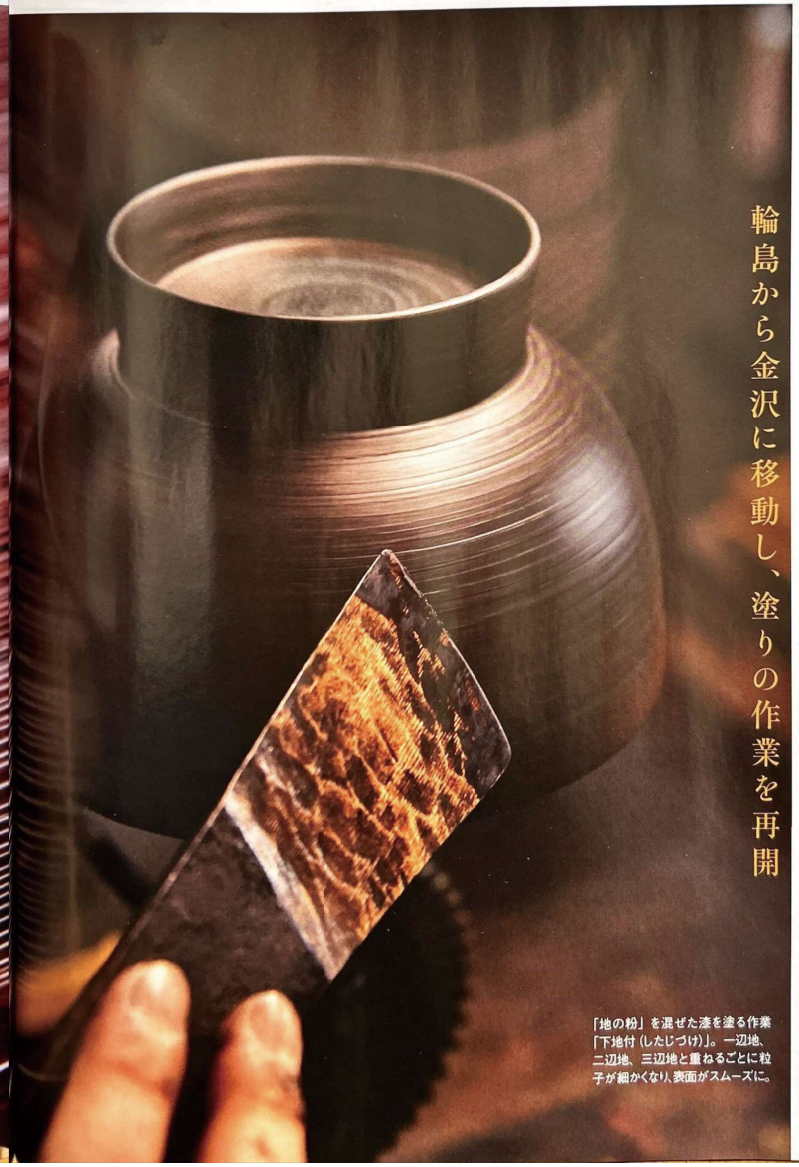
「ローカルガストロノミーが世界中で注目され、風土と食に惹かれた人々が能登を訪れるようになったいま、能登の食材に能登の器を纏わせれば、まだ漆に触れたことのない人たちにも、その魅力を発信できるに違いない。この小さな料理店が、衰退しつつある漆の世界をガラリと変える起点になるかもしれない」

そんな思いをよそに、元日に地震が発生。旅行中だった赤木さんは3日がかりで自宅と工房のある輪島市内に戻り、三井町内屋にある工房で一緒に働く6人の下地塗り職人たち、門前町内保にある「茶寮 杣径」で働く料理人たち、門前町鹿磯にある出版編集室で工芸の書籍を手掛けるスタッフの安否を確認できましたが、いずれの仕事場も住まいも損壊していることがわかりました。

「茶寮 杣径」は現在、金沢の浅野川沿いの「かなざわ紋」を間借りし、3月まで営業。以降は門前町鹿磯の古民家（下写真）で再開予定。

木粉を混ぜた漆を重箱の隅に塗って強度を高める作業「惣身付（そうみづけ）」。木製のヘラは自らの手なりに合うように自作したもの。

輪島から金沢に移動し、塗りの作業を再開



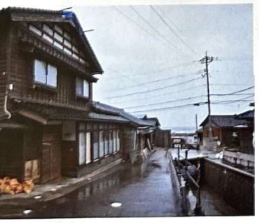
「地の粉」を混ぜた漆を塗る作業「下地付（したじづけ）」。一辺地、二辺地、三辺地と重ねるごとに粒子が細かくなり、表面がスムーズに。

鉄を混ぜた漆をまんべんなく塗って傷を付きにくくする作業「古鉄（こてつ）」。金属製のカトラリーに対応させたいという要望に応える。

移転した工房にて、右から順に弟子の山岸康平さん、赤木さん、山城優香さん、武内佳音さん。ほかに3人の弟子が赤木さんを支える。

料理を通じて漆のよさを伝える試みは続く

朱椀には「白いんげん豆のすり流し 玄米餅とオニオンヌーボーの汁粉仕立て」。7〜8品で構成される「茶寮 杣径」のコースの一品。



茶寮 杣径

石川県輪島市門前町鹿磯1-17
tel.090-4605-3737
※仮設店舗の工事が終了次第（4〜5月）移転・再開の予定。詳細はお問い合わせください。

全国の工芸ギャラリーが応援！

いつか買いたい輪島の漆器の作り手たち

輪島を拠点とする多くの漆芸作家たちは、被災し、避難生活を余儀なくされながらも、再開の道を懸命に開こうとしています。これまでのような制作ができず、作品のストックがない作り手も多い現状ですが、いずれは買って支援につなげたいもの。全国のギャラリーからのエールとともにご紹介します。

撮影＝高嶋佳代〔P.57～58〕sono(name)〔P.59～60〕大川裕弘〔P.61〕高嶋克郎〔P.61〕
取材・文＝櫻井正明〔P.57、58、P.61（篠原敬さん）〕編集・文＝柏木敦子（本誌）

「スペースたかもり」高森寛子さんが語る 応援したい、親しき作り手たち

漆器のよき「使い手」として作家からの信頼も厚いギャラリスト・高森寛子さん。震災後、ギャラリーに残っていた作品を紹介していただきました。

「これからも塗り続ける」作家たちの言葉に背中を押されて

自宅兼工房という作り手も多い輪島。総務省消防庁によると、輪島市の焼失家屋は約240棟、焼失面積は4万9千平方メートル。火災を免れても建物が倒壊するなど、被害状況はさまざまです。SNSでいち早く被害を発信しクラウドファンディングなどを行う作り手がいる一方で、ホームページの更新もままならず、オンラインショップも実質休業というケースも多いのが実情です。

普段使いの漆器専門ギャラリーの草分け的存在「スペースたかもり」主宰の高森寛子さんは、東京の自宅で迎えた元

福田敏雄（ふくだとしお）さん

「木地に生漆を塗り重ねる独自の下地手法が特徴の福田さん。普段使いの漆器を象徴する椀（参考価格11、000～24、200円）は、形、大きさ、色、塗り方違いなど合わせて約100種類。「スペースたかもり」での個展回数が最も多い作家でもあります。自宅兼工房は被災しましたが、これからも塗り続けるとのこと。この秋に予定している弊ギャラリーでの個展は、規模を縮小して開催できそうです」

※写真はすべて参考作品です。また、参考価格や作家情報は2024年3月10日時点のものです。今後の制作や個展情報などは作家の公式サイトやSNS、取り扱いギャラリーでご確認ください。

「茶寮 杣径」を手掛けた建築家・中村好文さん、輪島へ

「工房には、上塗りの漆だけで50貫（約187キロ）の備蓄がありましたが、その多くが転倒して流出しました」。電気も水道も止まるなかで、赤木さんは各所の片付けに奔走。多くの方の力を借りて、工房ほか各施設はいったん金沢へ引っ越しし、それぞれの住まいと仕事の再開へ動き出しました。また、「茶寮 杣径」を設計した建築家の中村好文さんが2月に輪島を訪れ、各施設を視察。赤木さんとともにそれぞれの再建に取り組んでいます。

さらにもうひとつ、赤木さんが進めているのは、漆器のベース作りを手掛ける木地師たちの家の再建です。「木地作り、下地塗り、中塗り、上塗りという工程のなかでも、木地作りを担う職人は特に後継者が不足しています。ここが抜けると分業が成り立たなくなります」。赤木さんはSNSを通じて「小さな木地屋さん再生プロジェクト」を開始。86歳になる池下満雄さんの住居兼仕事場の再建をスタートさせました。

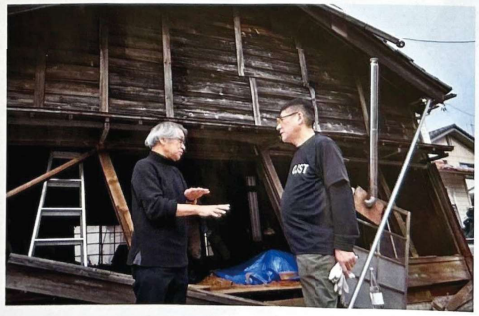
こうして漆器作りの環境を整えるために邁進している赤木さん。3月の段階で少しずつ支援の輪が広がり、徐々に再建への道筋が見えてきました。

池下さんの家に酒と花を供えて再建を祈願したのは、赤木さんと同郷で、この家の建て直しを担当する岡山「ミナモト建築工房」の皆さん。

中村さん（中央）は「茶寮 杣径」の再建とともに、池下さんをはじめとする木地師の家や赤木さんの新工房の設計にも携わることになった。

木地師・池下満雄さんがろくろを回し、椀の木地を挽く震災前の様子。現在、池下さんは金沢に二次避難し、仕事の再開を待っている。

かねて研究を重ねてきた、中村さんの「水も電気も自ら賄える小屋」のプランを、職人たちの住まいに応用すべく、構想を重ねる。



木地師・池下さんの倒壊した住まいを建て直す現場を訪れた中村さんと赤木さん。施工には日本各地の工務店が関わることになった。

小さな木地屋さん再生プロジェクト

赤木明登さんの工房「ぬりもの」が再建の資金を募集しています。

北陸銀行　輪島支店　普通
6044046　名義／有限会社ぬりもの　tel.0768-26-1922
www.nurimono.net
akito@nurimono.net